

特集

近畿支部代議員から見た今回の支部会

～自分たちの反省点を中心に～

中串孝志（和歌山大学）*、中道晶香（京都産業大学）、
成田直（川西市教育委員会）、蜂屋正雄（草津市立矢倉小学校）

* 2020年4月より甲陽学院中学校・高等学校

1. はじめに

事の始まりは長野県志賀高原で行われた年会。その中で開かれた近畿支部集会の場で、支部会員から「次回の支部会は“若手が主体となって”開催してみてもどうか」という提案があった。ちょうど年会のメインテーマが「若い世代が考える天文教育」で、意欲ある若手が多数近畿支部集会に参加していたこともあり、(やや無理強いしてしまったところがあるかもしれないが) やってみてもよいという積極的な意見が出されたことから、今回は“若手が主体となった支部会”をすることに決めた。そして、我々代議員は“フォローする”という立場で若手の活動に関わることになった。

本稿は、今後の近畿支部及び本会のためにも、代議員としての反省点を中心に述べることにする。本会で若手が生き生きと活動できる一助になれば幸いである。

2. フォローとは？

まず、読者諸兄姉一人一人に問うてみたい。あなたが“フォローする”という立場で若手と関わることになった時、どの程度関わるだろうか。会場や講師、プログラムをこちらで考え、土台を整えた上で「あとは自由にやっごらん。」とするか、何も教えずにまず自分たちで考えてやらせてみて、困ったときになって初めて手を差し伸べるか。

この問いは、どちらかが正解というものではない。また選択肢に挙げたものは両極端で、実際の関わり方はスペクトラムなものである

う。

今回、私たち代議員がイメージしていた“フォロー”は後者に近いものだった。これは現近畿支部代議員がみな学校教員（大学教員2名、小学校教員2名）だったこともあるのかもしれない。そこにはどうしても「育てる」という視点が入ってしまい、支部会の企画・運営を通して様々な壁にぶち当たりながらも可能な限り自分たちの力で乗り越えてもらおうと思っていたわけである。

3. 反省点

結論を述べてしまうと、今回の企画が始まった時点でゴールイメージ、ゴールまでの過程、フォローする側のできることとできないことを若手事務局チームと代議員で具体的に共有しておくべきだったと考えている。今回の反省点を一言で表すならば、「コミュニケーション不足」であろう。これは若手とベテランという構図に関わらず、二つのグループが一緒に企画を進めていく場合にも当てはまる。

今回、特に大きく異なったのがゴールイメージであった。初めて運営を行う担当者にとって、支部会の成功とは何なのか。代議員自身の経験でいうと、初めての支部会は「開催できれば成功」である。その上で、たくさんの参加者があればありがたいし、テーマに即した発表が多数あるとさらにありがたい。何度か近畿支部会に出席すると分かるが、テーマに関わりなく毎回発表してくださる方が一定数おられ、またその中にはテーマによって発表の視点を合わせてくださる発表者もおら

れる。そういったことをあらかじめ伝えておけば、若手チームの安心感に繋がったかもしれない。

このようなゴールイメージが事前に共有できていなかったため、今回の若手事務局には企画を進めれば進めるほど実現可能なことが増えていく、可能性が広がっていく、それに伴い業務内容が指数関数的に増えていくということが起こっていたように思う。こう書いてしまうと、どの規模の企画・運営が適切であったのか、若手事務局は何でもやり過ぎだったかのように見えるかもしれないが、決してそういうわけではない。要するに代議員に関わる場所は若手チームだけで済む事項と異なり処理スピードが遅くなるため、このやり取りが原因で若手チームの仕事の可能性の広がりブレーキをかけていたということである。

さて、今「代議員に関わる場所の処理スピードが遅くなる」と述べたが、この原因となったのが“コミュニケーションツールの違い”である。そしてこの違いは“スピード感の違い”ともなって現れた。これまで近畿支部代議員の間では、昔ながらのメールでやり取りをしていたため、議題を投げかけても返信があるのに2、3日かかることはザラであったし、そのスピードでのやり取りに何の疑問も不便さも感じていなかった。お互い様々な事情を抱える中で代議員を引き受けているという相互理解のようなものもあったかもしれない。とにかくそんなゆっくりとしたスピード感で、よく言えばそれぐらいの時間がかかることを想定しながら事を進めていたのが今の近畿支部代議員である。

一方、若手チームはLINEのテキストやグループトーク機能を使って打ち合わせを進めていた。1時間のうちに100件ほどの未読がつくようなスピードである。恥ずかしながら私たち代議員はこのスピードについていくこ

とができなかった。私たちの仕事の性質上、リアルタイムでそのやり取りに参加できなかったことも影響しているかもしれない。また、代議員にはLINEを使っていない者もいたため、情報共有がスムーズにできなかった。

もちろん、若手チームはこの点には配慮してくれていて、重要なことはメールで知らせてくれた。だから、それでいいと思っていた。若手チームが自主的に議論を進め、決定事項の報告や代議員にしかできない内容の依頼があれば十分に近畿支部会は成立する。そもそも近畿支部はそんなユルイ支部なのだ（少なくとも現・代議員の感覚では）。しかし、若手チームからのちょっとした疑問や不安にすぐに答えられない（答えていない）ことなどが積み重なり、若手事務局チームの焦りを誘発してしまった結果、本節の冒頭で述べたような「コミュニケーション不足」という反省に繋がるのである。

4. プロジェクト・マネジメントとして

ところで、今や大学も含め、猫も杓子もアクティブ・ラーニングである。その手法として学生／生徒がプロジェクトを遂行する「プロジェクト型教育」「プロジェクト・マネジメント教育」が多く行われている。企業でも「プロジェクトを回せる人材」が重視される。世は学校も企業もプロジェクト・マネジメントである。そこで、今回の教訓をより本質的に理解し、得られた知見を他に活かしやすくするため、この観点で問題の整理を試みる。

「最初の時点でゴールを含めた諸条件を確認し、ミッションの範囲（スコープ）を定め、明示的に共有しておく」ことはプロジェクト・マネジメントの基本中の基本であり、「プロジェクト憲章」「プロジェクト・スコープ・マネジメント」等々、大仰な用語もある。本節の執筆者（TN）は本務校での自身の担当科目でプロジェクト・マネジメントとしてのイ

ベント・プロデュースについて講義する側でもあるため、事態が悪化する原因がこの点にあることが明らかになるにつれ、忸怩たる思いであった。大学においてプロジェクト・マネジメント教育を実施する際、「教員が一切口を出さない方がうまく回る」ことが多いことを経験的に知っていたため、そのノリで、黙っていた部分が大きかった。しかし本プロジェクトにおいては代議員の我々もプロジェクトメンバーであるという意識が欠落していたように思われる。既出の通り我々4人全員が学校教員であったことが災いし、プロジェクトの「外」にいた。これは若手チームからすれば「丸投げされた」状態に見えたであろう（実際にそういう部分もあったかもしれない）。

プロジェクトの成否のカギになるのはコミュニケーションである。特に「プロジェクトマネジャーの仕事の8~9割はコミュニケーションである」とも言われ、プロジェクト・マネジメントにおいて「コミュニケーション・マネジメント」は重要な分野である。コミュニケーションにはミーティング等の「フォーマル」、それ以外の日常会話や飲み会も含む場の「インフォーマル」の両方が必要と従来から言われているが、今回のプロジェクトは直接会って仕事を進める機会がほとんどないため、その2つの中間のような、もしくは全く新しい形式である「インターネットを介したコミュニケーション」が主軸とならざるを得ない。従って使うツール、コミュニケーションのプラットフォームが重要になる[1]。このことを軽視していた感は否めない。また、ここまではちょっと考えれば気付いていたかもしれないが、しかし「ツールの違いがスピードの違いとなって現れる」ことはおそらく誰も予想していなかっただろう。この「インターネット経由のコミュニケーションへの依存度の高いプロジェクト・マネジメント」の

特性については、管見ではプロジェクト・マネジメント研究でも未だ深い議論は行われていないように見える。我々の見出したこの知見は、ひょっとすると重要なものかもしれない。

本節の筆者(TN)は、数年間、高大連携事業に携わったが、その間ずっとその公立高校の先生方とのリモート・コミュニケーションがうまく取れないことが原因で、生徒たちの活動をプッシュすることができなかった。その原因はまさに「ツールの違い」であり、最後までこの壁を乗り越えられなかった。昨今はLINEも通知が多過ぎるためレスポンスが悪く、Instagramのメッセージでないやり取りができない世代が現れたとも聞く。移り変わっていくツールをどのようにプロジェクト・マネジメントに取り込んでいくかが、今後増えていくであろう「ネットワーク上のプロジェクト・マネジメント」にとって重要な問題であることは間違いない。

「○○マネジメント」のような、プロジェクト・マネジメントにおける様々な方法論は、ビジネス書等で書かれるHow-Toのように言葉で説明可能であり、知識として広める（教える）ことができる。このような知識は「ハードスキル」と呼ばれる。それに対して体験的にしか得られない、伝えられない知識を「ソフトスキル」と呼ぶ。いわゆる「コミュニケーション力」などは、実際に人を相手にした経験が無ければ得られない。ハードスキルの各種方法論について、「なぜそれが必要なのか」の部分は、実際にプロジェクトに関わって「これではダメなのか、だからあの方法論があるのか」と気付いて初めて「体得」することができるという点で、ソフトスキルに含まれるだろう。プロジェクト型教育ではこのソフトスキルを得ることが大きな目的とされる。その意味で、我々は無意識的に「プロジェクト・マネジメント教育を実施する側」のような立ち位置であったと先述したが、実は

我々自身が「プロジェクト・マネジメント教育される側」として大いに学ぶところがあったと言えそうである。

5. まとめ

ここまで反省点を中心に述べてきたが、今回の会合自体は大成功と言っていいだろう。若手事務局チームの考えた企画の全てが実現したわけではないが、既述のようにまずは「開催できれば成功」なのである。にも関わらず十分に魅力的な内容になっていて、関西の天文教育を引っ張るミドルリーダーとも言えるお二人の講演や、スイスからの中継講演は若手だったからこそ実現したものだ。また、若手が各自のネットワークを駆使して新たな若い参加者を呼び込んだおかげで、近畿支部会史上最高の参加人数を記録した。

今後、若手とベテランであったり、主たる連絡ツールが異なる集団であったりと、異質な複数のグループが一緒に企画を進めていく機会はどの支部でもあり得るだろうし、またそのような機会があれば会の発展、ひいては天文教育の発展に繋がることであろう。積極的に行われることを期待したい。その際には、本稿が参考になれば、会を成功に導く一助になれば、幸いである。

注 釈

[1] ちなみに、メールによる情報共有は「フォーマル」、LINEは「インフォーマル」のようなイメージだったように思われる。

2019年度近畿支部代議員

* * * * *